

美術の窓 (106)

美術館での作品の鑑賞

—館長就任にあたって—

大和文華館館長 浅野秀剛

私が美術品なるものに初めて接したのは、18歳の春、生まれ故郷の秋田県能代市を出て、京都で浪人生活を始めた時であった。能代には、爽やかで、時に厳しい自然はあっても、美術品はほとんどなかったように思う。古建築も庭園も、威厳のある仏像も、そして美術館もなかった。美術というものは、教科書や画集で見えるものであった。もともと、高校2年の修学旅行は、京都・奈良にも行った記憶があるので、正確にはその時、古建築や仏像に接したことは間違いないが、ほとんど覚えていない。

私が美術品なるものに記憶に残る形で初めて接したのは18歳の春、1969年の京都に於いてであった。その年の4月5日から5月11日まで、京都国立博物館で「日本国宝展」が開催された。そこに弁当持参で3日間通った。3日間、朝から夕方まで過ごした記憶がある。展示会場は、混雑していたが、見るのが困難というほどではなかった。作品を鑑賞し、疲れたら庭を歩き、ベンチで休む。私にとって、至福の3日間であった。特に、感銘を受けたのは東寺の「兜跋毘沙門天像」で、毎日、朝と夕方の2回対面した。当時は、ジャンヌ・ダルクのような像だと思った。浪人の分際で、そんなことに丸3日も費やしたのであるから、その行く末は決して順調ではなく、紆余曲折、いろんなことがあったが、とにかくにも、それが私の美術の原点になり、39年後に、大和文華館の館長として、関西に再び戻ることになったのは、感慨無量といつてよい。

ヨーロッパやアメリカに行くと、日本に比べ、美術館が土地の人々になじんでいるなあ、という思いを深くする。欧米の美術館は、その館所蔵のコレクションを展示するのが主体で、企画展は稀である。それでもかなりの人が美術館に行く。日本では、企画展を開催しないと人が来てくれない。そして、例えば、メトロポリタン美術館は、金曜と土曜は午後9時まで開館しているが、夜になって、美術館に家族で来る人がたくさんいる。最近、日本でも、夜の8時・9時まで開館している美術館は珍しくなくなったが、どの館も夜は閑散としたものである。それは、日本においては、美術館はまだ非日常の空間であり、夜に家族で、また友達同士でぶらりと来ることが当たり前になっているとは、とても言えない。普段、美術館に行かない人に、美術館に行った経験を尋ねると、旅行の時、友達に特別展に誘われて、というのが圧倒的に多い。旅行の時を除けば、美術館は、面白そうな企画展をやっている時に行くところなのである。私は、天の邪鬼と言われようが、近年は、混んでまともに見ることの出来そうな展覧会には行かない。関東では、最近、大宣伝をして大量動員をする企画展が前にも増して多くなってきた。展覧会を開催する立場で言えば、人が多く来て下るのは喜ばしいことである。しかし、まともに作品を見ることができないのであれば問題外である。多くの人々が、旅行の時と、混雑する企画展の時しか美術館に足を運んでいないのであれば、実に悲しい。



美術館における鑑賞の仕方は人それぞれである。他の人に迷惑をかけなければ、いろいろなスタイルがあって良い。前の勤務地である千葉市美術館では、作品の前で話す人がいてうさという苦情がかなりあった。大声で話すのならともかく、作品の前で連れの人と話すのは当たり前だと思っていた私は、余程のことではなければ注意なくてよいと指示してきた。驚いたことに、静かすぎて気持ちが悪いという苦情を言う人もいた。作品を鑑賞するスタイルを時々観察すると、最初は少しゆっくり見て、疲れてくる(飽きてくる?)と、少しスピードを上げるか、スキップして出口に至る、というパターンが最も多い。18歳の私のように、弁当持参で一日美術館にいるというのは論外にしても、時間をかけてゆっくり見るという人も少なくない。しかし、大きな美術館あるいは大規模な展覧会において、200点の作品を1点1分平均で見ると200分、つまり3時間以上の時間になる。集中力も続かず、疲れ果てることは自明である。メトロポリタン美術館やルーブル美術館に行くと、それが仕事でもない限り、展示されている作品をゆっくり全部見ようという人はまずいない。たくさん展示されていれば選んで見る、それが普通である。何点選ぶかは個人差があるから、自身に適した量を把握することが望ましい。

近年の私は、企画展でも平常展でも、きちんと鑑賞するのはせいぜい10から20点である。ひとわたり会場を見渡して展示作品の中からそ

れを選び、少しゆっくりと見るのである。そういう見方をする人にとっては、大和文華館は正に理想の美術館である。展示している作品は、50から60点であるから、決して多いとは言えないが、ほとんどは極上のものである。あるいは何か展示する意味のある作品である。作品をゆっくりと味わい、疲れたら庭の草花の間を散策して半日を過ごす。見たい作品がたくさんあり、何度も来ることができるのであれば、欲ばらずに別の日に残しておくのもよいであろう。そういうことを毎日できる環境に身を置くことのできた幸せを、私は今噛みしめている。

兜跋毘沙門天(東寺)



季刊 美のたより No.163

平成20年7月4日

発行 大和文華館